

地域支援だより

県立南薩養護学校
校外支援係
No. 7
令和3年11月4日
(文責 中蘭)

愛着障害の支援の基本

前回、愛着障害とADHDの違いについて考えてみました。
今回は、学校での支援の基本について考えてみます。

○ キーパーソンの決定

愛着障害の子どもたちを支援するためには、どうしても一対一の状態が必要となります。愛着とは1対1の関係をつくることなので、一対一の関係性をつくらなければ、安全基地、安心基地を形成することはできません。そこで必要なのはキーパーソンの決定です。キーパーソンには誰が適任なのでしょう。キーパーソンは「いつも一緒にいなければならない人」ではなく、「ここでその子のことを一番知っている人」になります。クラス担任、養護教諭、コーディネーター、管理職、支援員等いつもそこにいる人なら誰でもなれます。

まず、愛着の問題が軽ければ、クラス担任が重点的に先手で関わって一対一の関係をつくることでキーパーソンになれます。朝、子どもが来たら、まず一対一になって何かを一緒に行ってプラスの感情を体験し、安心基地機能を担うことです。そして、帰りの会の後は、また必ず一対一になって今日を振り返り「これをしたのが楽しかったね。」と感情のラベリング支援（子どもの気持ちを察し、言葉で代弁してあげる）をしてから帰宅させることが大切です。さらに、愛着障害の程度が強いほど個別性の高いキーパーソンが望ましくなります。物理的にも個別の活動ができ、一対一になりやすいキーパーソンが必要になります。養護教諭、管理職、支援員等が適当となるのです。なぜなら愛着障害のある子どもは、他の子どもがたくさんいる状態、すなわち「一対多」の状態が一番安全・安心を感じられず、感情の問題を引き起こしやすいからです。

○ 気になる具体的行動への不適切な対応と適切な対応

子どもの行動	不適切な対応	適切な対応
①プリント学習のときにそのプリントを投げる。	・投げ飛ばしたプリントを元に戻して「さあ、やりなさい。」という対応。	・(今、そのプリントをしたくないので投げたわけだから)「教科書、見て」と別の行動に先手で誘う。それが難しい場合は、別のものにまず「認知をそらす支援」を割り込ませる。
②落書きしていたのを注意してもしたことを認めない。	・真正面から絶対「やった。」と認めさせようとする対応。	・落書きが上手な場合は「そういえば、この前の図工の時間の絵は上手だったね。」と評価されやすい描画行動に認知をそらす。落書きが下手な場合は「ほら虫がいる！」と全く違う話題に認知をそらす。
③「昼休み、バレーボールできる？」とできないことを聞かれる。	・「できない。」と全面否定する。「さあ、分からない。」とはぐらかす。	・できる時間があるなら「放課後できるよ。」とそらす。「昼休みは先生とドッジボールしよう。」別な行動に誘ってそらす。
④廊下に寝転んで、教室に入ろうとしない。	・引きずってでも教室に連れて行く。そのまま放置する。「教室に帰ろう。」と働きかける。	・「図書館に本運んで！」と役割を与えてそこを移動する理由を明示する。→「役割付与支援」として効果的。

○ 愛着修復のポイント

- ① キーパーソンの決定
 - ・キーパーソンを決めて、「一対一の対応」を促進
 - ・「キーパーソンにつなぐ」体制を学校として構築
- ② 感情学習
 - ・「何をしたら」行動、「何に付き」認知、「どんな気持ちになったか」感情を教える支援
 - ・「キーパーソンとともに学習した」という意識が大切
- ③ 大人が主導権を握る。
 - ・「これをしよう。」と主導権を握っての先手支援が肝要
 - ・そもそも「叱る」は後手支援のため効果は小さい。

参考文献「やさしくわかる！愛着障害」(ほんの森出版 米澤好史 2018)

* 次号では、愛着障害(AD)の保護者・親への基本的対応について考えてみます。